

講師紹介

岡田京子先生

今年、研修所では歌の講師として5月に岡田京子先生、10月に伊藤多喜雄先生をお招きしました。鼓童が古くからお世話になってきたお二人ですが、今の研修生にとっては初めての出会いです。今回はまず、5月に来島された岡田京子先生のご紹介をします。先生は、鼓童の舞台演目である「木遣り」「沖揚げ」「酒屋唄」などを取材・編曲し、鼓童に伝えてくださった方であり、ご主人の安達元彦先生と同じく「貝殻節」の編曲をしてくださっています。

寄稿

第二期・二二期

研修生との出会い

岡田京子

今年の初め、打ち合わせに来られた藤本容子さんとお会いした時、研修所のレッスンとして私にやってほしいことを三つ提案されました。

研修所の生活が、単に鼓童のステージに向かってだけあるのではなく、研修生一人ひとりのこれからの人生にとって、何かをもたらすことの出来るように、視野を広げるものでありたい。

それぞれの中にある自分の歌を引き出してほしい。今までやってきた歌作りから、もう一つ自分らしいものに深めていけるよ



先生を囲んで

うに。

歌つことの楽しさを伝えてほしい。この提案に私はたいへん心を動かされた。私自身の長年の課題と重なったからです。私はこの三つを進めて行く中心に、「歌作り」を据えました。とはそれに必ず付いてくると思ったのです。

第一回目

まず私が自己紹介をかねて、作曲をやりたいと思った若い日に師の原太郎氏が「作曲の母語は民謡だ」と言われたことを話しました。それから「日本と私」というテーマで研修生一人ひとりに話してもらおうことにしました。

日本の伝統音楽の伝承や再創造をやっている鼓童を目指しているとはいえ、あらためてそれを言葉にするとすると昏々とも戸惑ったよつでした。無理もありません。それは師に問われた時のかつての私の姿でした。まず、小泉文夫氏(比較音楽学)の「核音の理論」から入ることにしました。私自身がメカからウロコだった日本の音階の法則です。

「トーフ」とか「ヤキイモ」などの物売りの声は、もうすでに日本の民謡音階の特徴を明確に表わしています。歌とも思えないこの呼び声にそういう法則が働いているとはみんな信じがたい様子でした。また若い研修生たちの日常に物売りの声はなじみも薄いよつでした。

「ド」と「レ」の二つの音があった場合、私たち日本人はかならず「レ」で終わる民族であるというこゝろ、しかし学校の音楽教育やアメリカ、ヨーロッパなどでは「ド」で終わると教えられて来ている。この全く相反する音感覚を知識や教養として身に



つけさせられて来たのが音楽教育の歴史でした。

「ここで「トーフ」とか「もういいかい」などをみんなの身近かな言葉に置き換えて、大きな声で歌って見ました。

「ドレー」には「かぜー」、「ミレー」には「うーみー」というように。こういうことを繰り返すうちにみんなの顔付きが変わっていきました。自分の身体の中に、そのような音に反応する自分自身を発見して行つたのです。

二音旋律を三音四音と増やして行きながら、さまざま短い言葉にみんなで節をつけていく、ただそれだけの繰り返しの中で、みんなはまさかにも自分の音を自覚して行きました。

第二回目

次は宮沢賢治の詩の中から選んだ短い言葉の断片にそれぞれが節を付けて行きました。それを見せ合い歌い合い、感想を言い合いました。

ここでもう一度「日本と私」について一人ひとりに話してもらいました。昨日と打って変わってみんなの視点は明確になって



歌いあい感想をいいあいました。夜は、長時間をかけて、それらの作品を歌いあい感想をいいあいました。

第三日目
一日目と同じく続きの作曲に没頭し、夕方には全員十八人二四曲が完成しました。どの曲も美に自然で作爲がなく、しかも宮沢賢治の世界に助けられながらその人らしい歌が出来ていったのです。

第四日目
この日の午前中とそれから前の日も、合間を縫って歌をうたいました。アメリカのフォークソングや賢治自身の作曲による歌や私の作ったソングなどをうたいました。この時、もうこれらの歌をどう歌いたいか、どう歌えばいいのかわからない分かっていました。私の小さなブッシュを敏感に受けとめて歌ってくれるその声は、あらためて私に歌うことの素晴らしさを教えてくれました。これが三泊四日の研修生の時間のすべてです。

四日間をふりかえって
音のやりとりばかりをしたような四日間の後に残ったものは、一人ひとりを抱きしめたいようなとおしさでした。短い間にみるみる変化をとげ輝いていったみんなその瞬間に立ちあつたことのできた幸せを何といたらいいのでしょうか。

今回が単なる作曲のノウハウに終わらなかつた大きな理由の一つは、これが「研修所」という集団で取り組まれた成果のように思います。

一人ひとりが孤立して、共鳴や共感が育ちにくくなっている現在、ここで一年ないし二年を生きぬいて来たみんな。そこで高まってきたさまざまな気持ちや思いの一つの頂点としての表現だったのではなかつたのでしょうか。

私にもたくさんのお見がありました。鼓童と、研修生のみなさんに感謝です。

(詳細は『岡田京子つたの旅日記』八号に掲載。ご希望の方にはお分けしていますので先生まで直接お問い合わせください。連絡先は下記。)

プロフィール

岡田京子(おかだ・きょうこ)

1932年東京に生まれる。軍医だった父について中国(旧満州)を含む各地を転々として暮らす。

原太郎・清瀬保二氏に作曲を師事。アジアの音楽と民族に興味を持ち、「イフンケ」「喪興の途(サンヨのみち)」など、アイヌや朝鮮をテーマとする作品を多く発表。

現代座の木村快氏の仕事に共感。30年間舞台音楽の仕事でこの劇団や観客と関わって来た。

1967年に作曲家・安達元彦氏と結婚。同じ時期に、笠木透氏のフィールドフォーク運動を知り、岐阜の「我夢土下座」、山口の「風の座」など、それぞれの地域で自分たちの歌を作り続けている人達に出会って行く中で、安達元彦氏ともども、自分の音楽の方向について大きな変更を迫られる。

1980年頃から、「めだか大学」という小さな音楽塾を開く。平行して1990年前後より、全国各地をまわって歌の会を開き、歌をつくり、また各地で生まれた歌を紹介するなどの旅をつづけて現在にいたる。

主な作品

著書：「うたあんぎゃ」(同時代社 03-3261-3149)	1,400円
「うたの旅」(駒草出版 03-3941-2845)	1,800円
「岡田京子<うたの旅日記>1号~8号」(自費出版)	500円
C D：「さくらんぼ」(岡田京子with我夢土下座)	2,500円
「筑豊の歌」(重藤脩の詩による)	2,000円

作品に関するお問い合わせ：岡田京子 03-3337-5830

研修生の感想より 松井元(二年)

岡田先生と出会って嬉しかったのは、作曲という行為を通して自分の性格、自分らしさが音によって表現できたと思えたことです。自分らしさというのはいちばん求めていたもの。言葉ではなく音だったことで、素直な自分が出てきたようです。仲間との作曲も同じで、十八人みんな同じ詩なのに音の選ひ方が全然違う。三つ四つの音を選ぶだけでその人の、普段見えない部分が現れたことに驚きました。普段は反抗的なところも見せる人が作った曲はすごく優しいメロディーだったし、またいつもは穏やかな感じの人がすごく勇ましい勇ましい音が紡いだことがとても印象的でした。先生が、とても分かりやすく導いてくださったので初めての作曲にも関わらず、とても素直に自分に向き合えました。

最後の日に「空よ雲よ」という先生の歌を歌ったんです。「ほら田んぼを目に浮かべて歌うのよ。」ただ言葉を言うだけじゃなくて、言葉ひとつひとつの絵を心の中に描いて歌うんだよ、というその岡田先生のパッションが伝わってきて、一緒に歌いながら涙がとまりませんでした。

振り返ってみると、岡田先生の前では気が取つたり格好つけようということがまるでなく、自分らしさに少し気づけたのです。耳に残っているあの時の先生の声とアコースティックの音色を思い出しながら、今、自分は何事に対してもそういう姿勢で素直に臨んでいきたいと思っています。